ミシェル・マゴリアン『おやすみなさい，トムさん』を読む

― 虐待する母親の呪縛を解く ―

Michelle Magorian's *Good Night, Mr. Tom*
– Breaking the Curse of the Abusive Mother –

川　端　有　子*
Ariko KAWABATA

要　約　ミシェル・マゴリアンの『おやすみなさい，トムさん』は，第二次世界大戦中，村に疎開してきたウィリアム少年が，村の老人トムに引き取られ，母親に受けた虐待の傷をいやしつつ成長していく過程を描いた作品である。従来，戦争を知るための歴史小説として，または主人公二人の心の交流から読み解かれる本書を，虐待する母親との関係に重点を置いて読み直し，戦争は問題解決の契機に過ぎないことを示しつつ，ウィリアムが母の呪縛から解放される経緯を分析した。

キーワード：第二次世界大戦・学童疎開・児童虐待・ピューリタニズム・母であること

Abstract　*Good Night, Mr. Tom* written by Michelle Magorian is a novel for young adult readers that describes the growth of William, a young boy in England evacuated to a remote village during WW2. He stays with Mr. Tom, a difficult old recluse. Mr. Tom comforts and cares for the boy, who was abused and battered by his mother, as he regains his health. The moving story of the old man and the child has been acclaimed since its publication. The book is replete with historical events during the War, so it has been helped as a historical supplement in second grade schools in England. The current work focuses on the abusive mother, rather than the main two characters, and it analyzes the process by which Will breaks his mother's spell, showing how the war acts as a catalyst for the characters' happiness.

Key words：WW2, Evacuation, Child abuse, Puritanism, Motherhood

はじめに

ミシェル・マゴリアン（Michelle Magorian）は，1947 年にポーツマスで生まれたイギリスの児童文学作家で，現在に至るまで，数多くの子どもやヤングアダルト向けの作品を著している。中でも第二次世界大戦時を背景とした歴史小説が 5 冊あり，その中の 1981 年に出版された『おやすみなさい，トムさん』（*Goodnight, Mr. Tom*）[1]は，デビュー作であり，82 年度のガーディアン賞，国際読書協会賞，オーストラリア児童文学賞，アメリカ読書協会のベストブック賞などを受賞，カーネギー賞にも推薦され，一躍彼女の名前を広く世界に知らしめた[1)]。その後，俳優経験のあるマゴリアンは，自らこの作品を戯曲化・ミュージカル化し，それらは以来いくども上演されている。1998 年にはテレビドラマ化されて人気を博し，2010 年にはヘイ・ブックフェスティバルで「時代を超えて愛されるパッフィン・ブックス」にノミネイトされるなど，現在も愛読されているこ

*　人間生活学研究科人間発達専攻
Graduate School of Human Life Science Division of Human Development

[1] 版により *Good Night, Mister Tom*, *Good Night, Mr. Tom* と記述されることもある。

とが伺える[2]。

物語は1939年9月，イギリスがドイツに宣戦布告するまさにその前日，ロンドンから集団学童疎開の一員として，8歳のウィリアム・ビーチ少年がリトル・ウェアウォルド村に到着するところから始まる。戦時下の義務を果たすべくウィリアムを受け入れたのは，気難しく不愛想な老トム・オークリーだった。実の母親によって虐待され，心身に傷を負うこの少年は，老人の世話を受けて回復し，自らの生きる場所を見つける。その一方でトムのほうも，妻と息子を失ったことによる痛手をいやされていく。牧歌的な村の風景と共に展開する喪失といやしの物語は，ある種，典型的な児童文学のパターンをなぞり，感傷的で予定調和的との批判はあるものの，読者の心を打つことは否定できない。また物語の背後には，開戦から一年間，ダンケルクの戦い，チャーチルの首相就任，ロンドン空襲などの詳しい歴史が書き込まれており，イギリスでは灯火管制，疎開，ガスマスク，空襲警備員，防空壕など，戦時下の暮らしを，現代の子どもたちに教える教材としても重用されている[3)]。

たしかに詳細な調査をもとに書かれたこの作品は，そのような学習に有用ではあろう。しかしよく読んでみると，マゴリアンの主人公が心身共にトラウマを負うのは，戦争のせいではまったくない。むしろ戦争は，彼が虐待から救われるためのチャンスだったのであり，ローズメイ・ファム・ディンのいうように「触媒としての機能を果たしている」だけなのである[4)][2]。従来この作品は，もっぱらトムとウィリアムの関係を中心に論じられてきたが，この小論ではその関係にはあえて触れず，ウィリアムの母親ビーチ夫人―虐待する母親―に注目し，その母親が心身に及ぼした支配―呪縛といってもいい―から，ウィリアムが解き放たれる過程を明らかにしたいと考える。

1　先行研究

マゴリアンは，インタビューに答えて，ウィリアムという主人公を思いついたのは，ロンドン空襲当時，市内の病院で看護師を務めていた彼女の母親から聞いた話がきっかけだったと語っている。

> （William）reminded me of the two little boys my mother had told me about when she had been a nurse in a London hospital during the blitz. One had crawled under the bed never having slept in one before; the other had been sewn into his underwear for the winter. [5)]

まともにベッドに寝たこともなく，下着のシャツとズボン下を縫い合わされていたという描写は，ウィリアム少年の造形に生かされている。

彼は体中がみみずばれと青あざだらけ，足にもひどい折檻のあとを残し，びくびくと怯え続け，もうじき9歳になろうというのに，栄養失調で5歳くらいにしか見えず，字を読むことも書くこともできない。彼を受け入れることになったトムは驚くが，そもそもトムが受けいれ宅に選ばれたのは，家が教会から近いという理由からだった。ウィリアムの母親は，受け入れ先が敬虔なキリスト教信者であるか，教会のごく近くに住んでいることを条件に，子どもを託してきたからである。子どもは生まれながらにして邪悪な存在だから，折檻することによって矯正しなければならないと考え，お仕置き用のベルトを持たせていたことからも，ビーチ夫人が，狂信的なまでに熱心で，きわめて厳格なピューリタンであり，その教義に従って，息子をしつけ，罰し，懲らしめるという名目で虐待していたことが判明する。彼女が息子の受け入れ先にと書いてよこした手紙はこのように書かれている。

> Dear Sir or Madam, I asked if Willie could go and stay with God-fearing people so I hope he is. Like most boys he's full of sin but he's promised to be good. I can't visit him. I'm a widow and I haven't got the money. The war and that. I've put the belt in for when he's bad and I've sewn him in for the winter. [6)]

物語の最初の半分までは，ビーチ夫人は息子に及

[2] この点でこの作品は，虐待されていた子どもが疎開を契機に解放されるというテーマを共有するキンバリー・ブルベイカー・ブラッドリーの『わたしがいどんだ戦い　1939年』（Kimberly Brubaker Bradley. *The War that Saved my Life*, 2016）を大きく先取りしていたといえる。

ぼした影響から間接的に描かれるが，ちょうど中盤で，ウィリアムが再びロンドンに呼び寄せられるところで，初めて直接登場する。ウィリアムが村からやってきたトムに救出されてのちも，ウィリアムはひどい PTSD に悩まされ，母親の自殺が伝えられたあとも，母親の影におびえ続ける。最終的に彼はその影から解放され，トムの息子として，そしてウィリーではなくウィルと呼ばれるにふさわしい少年に生まれ変わるというのが，母子関係から見たこの物語のプロットである[3]。

最初から最後まで，容赦ない悪役を演じる母親は，「共感の余地もなく，一面的」に描かれていると批判されることも多い[7)]。この虐待する母親の非道な仕打ちについては，小学生に読ませるに忍びないと感じる教師もけっこういた，と作者は語っている[8)]。

しかし，興味深いことに，マゴリアン自身は，この作品の 40 周年記念スピーチにおいて，ビーチ夫人という人物をもっと深く掘り下げて書きたかったという感想を口にしているのだ。

> In *Goodnight Mister Tom*, I could have revealed more about William's mother but decided not to as I felt it would take the attention away from my two main characters. But when it came to writing the Libretto for the musical, I wanted to show that although her behaviour towards William was abusive, she wasn't an evil person. She was extremely ill but had no one to turn to for help. [9)]

そして上記の，生徒に虐待の場面を読ませることを阻んだ教師について「ご自分の生徒のことは私よりよくご存じでしょうから」と容認しつつ，ミュージカル版ではビーチ夫人が歌う歌を付け加えることで彼女の事情をもう少し明らかにする必要を感じたと告白している。

ビーチ夫人の独唱による歌は「わたしはひどく驚いた（I'm Frightened）」と「もし／わたしが少女だった頃」（If Only／When I was a girl）の二つで，その中で彼女は心情を吐露し，苦しかった子ども時代の思い出と，自殺を選んだ理由を告白する。それ以降，マゴリアンは学校の教師や読者の子どもたちに，なぜビーチ夫人があのような残酷なふるまいをするのか問われた時には，この詞を送ることにしているという。[10)]

作者自身がまだ描く余地があると考えていたことからも，ウィリアムの母親はわき役といえども，考察に値する背景を持つといえるだろう。そして，作者が与えた詞による解説以上に踏み込むこともできるように思われる。本作をめぐり，ビーチ夫人に（少なくともその一部は）焦点をあてた先行研究は二つある。

ひとつは，ディサビリティ・スタディーズの見地から，「精神を病んだ，もしくは PTSD の母親と暮らす子ども」というテーマの児童文学を論じるケリー・キッド（Kerry Kidd）である。彼女は次のように述べている。

> *Goodnight Mr.Tom* depicts a clearly unstable, presumably semi-psychotic mother, whose own mental problems and delusional religious qualities produce and emotionally damaging (and, for William's little sister, literally life-destroying) experience of childhood. [11)]

キッドは，ウィリアムの狂気の母親がスラム街のディストピア的な世界の要素として描かれ，精神障害が「邪悪」と同一視されていることに，かなり批判的である。しかし彼女は，この母親が精神を崩壊させた理由や背景については深入りしていない。

もうひとつは，ヴァネッサ・ヨーセンが児童文学を「エイジ・スタディーズ」の観点から捉える試みの中で，この作品を取り上げている部分である [12)]。ヨーセンは，ビーチ夫人を昔話の継母にまで遡る典型的な「邪悪」な，もしくは「育児放棄」する母親像の伝統に位置づけ，この物語は老人と少年の交流を描くものであり，そのためちょうど中間にあたる世代が悪く書かれがちだと述べ，その結果，ドラマを盛り上げるためにもビーチ夫人がとりわけ極端に悪者として描かれねばならなかったと主張する [13)]。

しかし，ヨーセンは，「子どもの適切な養育ができないことが貧困と結び付けられている」点が，マゴリアンの中産階級的倫理観の限界であるとし，また，ビーチ夫人がピューリタンであることにふれ，その厳しい体罰や禁欲が「選択と信仰の問題である」

[3] Willy は弱虫を意味する言葉で彼もそういってからかわれているが，Will には意志という意味がある。

と述べている[14]。しかし，テクストからビーチ夫人の境遇を探ると，貧民街においても孤立し，その信仰の強さゆえの自己矛盾に心を病んでいったこの母親は，もっと深く文化に根差したトラブルを抱えていたのではないかと考えられる。それでは，間接的，直接的にビーチ夫人がどのように描かれているかをもう少し詳細に分析することにしたい。

２　ビーチ夫人の造形

ピューリタンの信条に基づき，子どもは生まれながらにして罪深いものであり，体罰と脅しによってその意志／強情さ（willfulness）をくじくことが，最上のしつけであると，ビーチ夫人が考えていることは，トムの前にはじめてあらわれたウィリアムの様子から明らかである。恐怖と暴力で息子を屈服させ，たとえ自分から離れた所に疎開しようが，彼の意志をくじき，力で支配していることが見てとれる。それはウィリアムを受け入れたトムによる，心を込めた世話と看護とは対照的である。男性であるトムが，伝統的には女性の役割とされたケアとキュアを受け持ち，実の母親が暴力でもって支配するというジェンダーの逆転には，マゴリアンの作意が認められる。

映画や芝居，音楽などの娯楽を罪悪視し，聖書を暗記することだけを重んじるというのは，確かに初期のピルグリム・ファーザーズなどに見られるような，厳格なピューリタン的信念である。子どもの“willfulness”，つまり自己主張や自我，頑なさを徹底的に叩きつぶし，おとなへの恭順を要求するところなど，コットン・マザーの時代ならともかく，20世紀において普通ではない。

はじめて家を離れ，母のいない環境で，ウィリアムはいかに自分の母が普通でなかったことを発見していくことになる。とりわけビーチ夫人が，男の子はそれ自体「悪い子」であると信じていること，まだ8歳のウィリアムに，女の子と遊ぶことすら禁じるのは，彼女の異様なほどの性的潔癖さへのこだわりを示していると考えられる。また，彼の下着が上下縫い合わせられているのも，恐らく自慰を防止する目的であったと推察できる。性に関わることはすべて罪深いことだと考え，息子の性を抑圧し管理下に置こうとするビーチ夫人は，ピューリタン的であると同時に，「とりわけ自らのセクシュアリティと母たることに怯えている」と考えることができる[15]。

ウィリアムには父親がいない。作中に父親についての言及は一切なく，ビーチ夫人は未亡人だと自称してはいるが，父親の行方と息子の出生とに，どういう事情があったのかはわからない。しかし，自らの信仰が何よりも禁じる罪深い行為によって息子を得ることになったことこそ，彼女の執拗な虐待の根源にある。目の前にいる息子が，自らの罪を暴くものであり，その罪の証そのものであるとしたら。ただ罰を与える恐ろしい存在としての神を崇めるビーチ夫人は，もともとその宗教のもとに生まれたのか，それとも自らの罪深さゆえに深入りしていったのか。だが，存在そのものが彼女の罪である息子を前に，ビーチ夫人が精神を病んでいったのは確かだ。

はじめてビーチ夫人が実際に登場するのは，皮肉にも「故郷（Home）」と題された章である。リトル・ウェアウォルド村に来てから半年がたち，ウィリアムは「ウィル」と呼ばれることにも慣れ，すっかり健康を回復し，字を学び，絵を描くようになり，子どもらしさを取り戻してトムの家が自分の家（Home）であるように感じていた。そこに，突然ロンドンから手紙が届き，病気だから帰ってきてほしいと伝えてきたのである。

ウィリアムはたくさんの土産を持たされ，絶対にまた戻ると約束し，後ろ髪を引かれながら，自分が生まれ育ったロンドンの下町に向ったのだった。最初，彼は母親がわからない。

> She was very pale, almost yellow in color, and her lips were so blue that it seemed as if every ounce of blood had been drained form them. The lines by her thin mouth curved downwards. He glanced at her body. She was wearing a long black coat, fawn stockings and smart lace-up heeled shoes.　(185)

また，禁欲的な生活をする女性であるにもかかわらず，ストッキングとハイヒールへの言及には違和感を覚える。あとで述べるが，ビーチ夫人はどうもこの貧民街の住民とは属するクラスが違うようなのである。

母は最初ウィリアムがわからなかった。トムのもとで健康を取り戻し，しっかりとした自己肯定感を得た彼からは，おどおどした卑屈な様子も消え，母親の言葉を否定して自己主張さえするようになって

いた。ビーチ夫人は恐れおののき，なんとかして支配力を取り戻そうと，彼をウィリーと呼び，「うぬぼれの罪」を犯していると非難し，彼の willfulness を挫こうとする。そのうえ，ウィリアムを待っていたのは，ビーチ夫人が近隣の人々にはひた隠しにし続けていた「びっくりプレゼント」（surprise），すなわち泣き声が響かぬよう口にガムテープを貼られ，箱の中に放置されて，名前も与えられていない赤ん坊の妹だった。父なし子の新生児は，さらに明らかなビーチ夫人の罪と罰の印であり，それを「イエス様からの贈物だ」とウィリアムに説明するところに，彼女の信仰とセクシュアリティ，母たること（マザーフッド）との大いなる矛盾が際立って浮かび上がる。

質問を封じ，発言を黙殺し，暴力で脅し，再びビーチ夫人はウィリアムを服従させる。ウィリアムは階段下の押し入れに閉じ込められて折檻され，妹の世話を任せられた。そしてそのまま，彼の消息は立ち消えた。彼からの手紙が来ないことを心配し，トムが行動を起こすのは一か月後のことであった。

ロンドン行の列車に乗ったトムは，空襲警報の響く街の中で，住所をたよりにウィリアムを探す。今度は街や家の様子を見，近隣の人々の噂話を聞いたトムの目から，ビーチ夫人の生活環境が描写される。牧歌的なリトル・ウェアウォルド村は架空の地名であるが，ウィリアムが育ったのは，テムズ川南岸に実在するデプトフォードという町だ。造船をはじめとする軍需工業が盛んで，ロンドン大空襲では大きな被害を受けた。トムはこの町を見てその悲惨な様子に心を痛める。

> Accustomed now to the darkness, he could make out only too clearly the awful living conditions. Small dilapidated tenements stood huddled together, all in desperate need of care and attention. So this was William's background, he thought.（205）

“care and attention” が必要な町の様子はウィリアムの，そしてビーチ夫人の心象風景でもある。

警備員は，ビーチ夫人の印象を，「お高くとまっていて人づきあいをしない，福音を説いてばかりいる信心深いタイプ」（208）と語り，隣人の女性は「つき合いがわるい人でね。ちょいと奥さま気取りなのさ，こういっちゃなんだが自分のことを聖人さまだとでも思ってるみたいでね」（209）と述べる。「一階と二階に部屋があって，時々二階を人に貸して自分は下で寝てるって言ってたがね，ほんとだかどうだか」。（210）

彼らのロンドン訛りの強い言葉は，明らかにビーチ夫人の言葉遣いとは区別されている。つまり，ビーチ夫人はもともとデプトフォードの住人ではないのだ。そして彼らが言うように，おそらく彼女はこの人たちとは所属するクラスが違う。彼女と町の人を隔てていたのは彼女の過度の信仰心だけではなかった。

戦時下のロンドンでは，軍需工場の需要が増大し，労働者階級の女性はどんどん工場に働きに出た。子どもたちを学童疎開に出した家庭では，たいてい父が出征し，母が工場に勤め，子どもの居場所がなくなったという事情を抱えていた。だがビーチ夫人が職についていた様子はない。彼女が，その言葉づかいから推測されるように労働者でなかったとするなら，工場労働に就くには体面が邪魔をし，生活に困って孤立し，身を売らざるを得なかった可能性がある。少なくとも隣人の女性はそう疑っている。そうなると，先述したストッキングとハイヒールは，「堕ちた女」の印とも考えられる。信仰深い聖女としてふるまうビーチ夫人の抱え込んでいた矛盾は深い。

キリスト教文化は，長らく女性を二分し，聖女と娼婦の二極に分断してきた。イエスの母は原罪失くして懐妊したとして，聖なる母性のみを崇め，セクシュアリティを危険で汚れたものとして娼婦扱いする。聖母マリアとマグダラのマリアの二極化は，西洋文化に深く刻み込まれたミソジニーの系譜である。厳格なピューリタニズムに囚われたビーチ夫人が，自らのセクシュアリティと母たること（マザーフッド）に引き裂かれ，心を病むまでに陥ったのは，彼女のせいだけといえるだろうか。彼女が属するクラスがちがう人々の中で子どもを抱え，孤立して食い詰めたのはけっして彼女自身の「貧困と選択」のせいとは思えないのである。

留守宅と見えるビーチ夫人の家に押し入ったトムと警備員が目にしたのは，死んだ赤ん坊を抱いたまま柱にくくりつけられて放置され，排泄物にまみれて栄養失調に陥り，意識もない状態のウィリアムだった。姿を消したビーチ夫人はその後，自殺した

ことが判明する[4]。

3　ウィリーからウィルへ

救出されたウィリアムはひどい栄養失調と PTSD で悪夢にうなされ，意識不明であった。彼を精神分析や施設の治療にゆだねるにしのびず，トムは誘拐まがいの方法で彼を病院から奪還し，連れ帰ってひたすらに愛情を注ぎ，手を尽くして看病した。再び自然豊かなリトル・ウェアウォルド村で，親切な人々にかこまれてウィリアムは健康を取り戻す。しかし，彼が再びウィリーからウィルに戻るためには，母をとらえていたセクシュアリティと母たること（マザーフッド）の呪縛から解放される必要があったと考えられる。

そのための重要な役割を果たす人物が二人いる。一人はウィリアムと同じ疎開児童の一人で，ユダヤ人のザック少年。もう一人は小学校の教師，ハーディング先生である。

ザックは巡業する劇団員である両親のもと，かなりリベラル(a bit forward)な育てられ方をしたらしい。しょっちゅうシェイクスピアやディケンズなどを引用する，文学好きの大人びた少年である。ユダヤ人であること，役者の子どもであることでは，本来なら 1939 年の村社会ではかなり差別的な扱いを受けてもおかしくはないのだが，一風変わった少年として，むしろ村の子どもたちとウィリアムの間を取り持つような役割を果たしている。小学校の課外活動の劇にその有能さを見せ，ウィリアムを，芝居をはじめとする芸術の世界に引き込むのも彼である。ビーチ夫人がウィリアムに刷り込んだ，神学とセクシュアリティの矛盾を解決してくれるのは，まずザックの言葉であった。

> “Don’t [babies] come from Jesus, like?”
> “Of course not. Oh,” he said. “you don’t know.”
> “Know what?”
> “About sex.”
> Will blushed scarlet. “I know it’s somethin’ dirty and you goes to hell for it.”
> “Rot!” exclaimed Zach. “We wouldn’t be here if it wasn’t for sex. It’s what happens between men and women when they love each other.”　（246）

セックスは罪悪であり，子どもはイエス様からの贈物だと教えられてきたウィリアムは，当惑するが，ザックは自分の親から聞いた話にウソはあり得ないと断言する。ウィリアムはこうして，母が教えた世界観は歪んだいびつなものであったことを知るのである。

ザックはまた，ハーディング先生に赤ちゃんが生まれたことを告げる。これはウィリアムをひどく動揺させた。ハーディング先生は一目会った時からウィリアムの憧れの的，いわば聖母マリアにあたるような人だったからだ。彼女はパイロットの青年と結婚したばかりで若く美しく，彼女のクラスに入りたい一心で，ウィリアムは懸命に字を練習したのである。彼は聖母とセクシュアリティを結びつけねばならない。そのうえ，先生の赤ん坊は女の子であった。ウィリアムは。自らの手の中で死んだ赤ん坊の妹を思い出さずにはいられない。自分が餓死させてしまったという罪悪感は，いまなお彼を苛んでいた。

意を決してハーディング先生の家を訪ねたウィリアムは，庭の中で赤ん坊を抱く先生の姿に心を打たれる。その聖母子像のような姿は，赤ん坊の口にガムテープを貼ってその声と欲求を封印し，箱の中に放置したビーチ夫人とは際立った対照をなしているといえよう。

> In Will’s eyes she was more beautiful than ever. A little on the thin side nor, but her eyes were still as large and blue, her hair still as golden and her voice was just as melodious, if not more so. He watched her hold the baby in the air and bring her down to her face, where she blew raspberries into her tummy. Sometimes she would just gaze on her and look happy and sad all in one moment.　（252）

つづいて先生が赤ん坊に授乳する姿を見たウィリアムは，妹が死んだのは自分のせいではないことを悟り，自責の念からようやく解放される。ハーディング先生は，セクシュアリティも母たること（マザーフッド）も包括した，あるべき理想の母親像として，ウィリアムを母の呪縛から解き放ったといえよう。

---

[4] いうまでもなく自殺はキリスト教では禁じられており，最後にビーチ夫人は自らの信念を裏切って／信念に裏切られて，亡くなったということができる。

最終的に，ウィリアムがビーチ夫人の精神的支配から脱するのは，ザックを失うという衝撃を受けた時だった。ロンドン大空襲が始まり，街の被害の様子を聞いて両親の安否を確認にロンドンへ出かけたザックは，家族もろともに空襲にあって死んでしまう。生きることの楽しさを教えてくれた友の死に，ウィリアムは途方もない悲しみと怒りに駆られる。

> Catching his breath for a moment, he stood up stiffly and looked up through the branches of the trees.
>
> "I hate you, God. I hate you. You hear me? I hate you. I hate you. I hate you."
>
> He stood yelling and screaming at the sky until he sank exhausted and sobbing on to the ground. (300)

ビーチ夫人は，戦争は人間に対する神さまの罰だと語っていた。それならば自分は神を憎もう，神がザックを奪い，それで何かを罰したつもりであるならば。ウィリアムの神への罵りの言葉は，この瞬間，彼が完全にビーチ夫人の教えた「罰する神」と決裂したことを示している。こうやって初めて，ウィリアムはザックの死を受け入れ，自分を養子にしてくれたトムを「父さん」と呼び，生きることを肯定することができるようになったのだ。

4　おわりに

マゴリアンは，『おやすみなさい，トムさん』のなかで，1939 年から 40 年にかけての戦時中を背景に，具体的で写実的な筆致でありながら，傷ついた都会の子どもを田舎の老人が癒し，同時にその子どもが頑なで偏屈な老人を救うという寓話的な物語を描き出した[5]。

母親に「罪深い子ども（sinful child）」として育てられたウィリーは，母から解放された時，「無垢の救済者（innocent redeemer）」となったのである[6]。この小論では，その過程において，キリスト教的な女性像の二分化が解体され，ウィリアムが母の呪縛から解放されるさまをたどってきた。残酷無情な虐待をする母親とのかかわりからそれを検証することで，彼女が単なる邪悪な人物ではないことが明らかになったといえる。

先述したように，戦争の勃発と子どもたちの疎開は，物語を大きく動かす最も重要な動機として作用している。マゴリアンの戦時期歴史小説において，第二次世界大戦は，古い価値観を崩壊させ，新しい世界をもたらす契機なのである。この，ある意味，肯定的といってもいいような戦争観は，イギリスの児童文学に珍しいものではないが，80 年代以降世界中で起こった幾たびもの紛争や戦争を経た現在，そのままであるとは考えにくい。その詳細や転換点については，今後の研究において明らかにしてゆきたい。

引用文献

1）https://michellemagorian.com/goodnight-mister-tom/awards/　2022/10/17 閲覧

2）同上

3）Smith, Keith C. and Lynne A. Barton: "Historical Fiction in the Middle Grades" Presented to the Annual Meeting of the College and University Faculty Assembly National Council for the Social Studies Phoenix, November, 1994.

4）Rose-May Pham Dihn: Wartime womanhood in Michelle Magorian's World War Two Novels for the Young, *Revue LISA/LISA E-journal*, Vol.VI N'4 (2008), pp 174-199. Section 16.

5）https://michellemagorian.com/about-michelle/interviews/the-colours-of-goodnight-mister-tom/ 2022/9/18 閲覧

6）Magorian. Michelle: *Goodnight, Mr. Tom*. Harper Trophy, 23 (1986) この後この本からの引用は本文中にページ数で記す。

7）Kidd, Kerry: The Mother and the Angel: Disability Studies, Mothering and the 'Unreal' in Children's Fiction, *Disability Studies Quarterly*. Vl. 24, No.1. (2004) p.2

8）https://michellemagorian.com/mrs-beech/ 2022/10/17 閲覧

9）同上

10）同上

[5] この点で，本作はヨハンナ・スピリの『アルプスの少女ハイジ』（1880－1881）にきわめてよく似ている。

[6] 「罪深い子ども」と「無垢の救済者」はロマン主義勃興を境に二分される子ども観である。

11）Kidd, p.2
12）Joosen, Vanessa: “Age Studies and Children’s Literature” *The Edinburgh Companion to Children’s Literature* edited by Clementine Beauvais and Maria Nikolajeva, Edinburgh University Press (2017), pp79-89
13）Joosen, 86.
14）Joosen, 85.
15）Dihn, 前掲書。